



双塔

カトリック新潟教会

2019年4月
No. 371

不信仰のトマス

協力司祭 鎌田 耕一郎

（トマスの疑い）復活の八日目、使徒たちは主キリストと最後の晩餐を共にした。二階の間に集まっていた。トマスもそこにいた。彼はかつてキリストが、敵意の待つエルサレムに上ろうと行った時、使徒たちの間に起きた不安とためらいの中で、「私も彼と一緒に死にに行こう」（ヨハネ 11・16）と強く言い切ったことを思い起こしていたかも知れない。しかし、それに続く日々の出来事は、あまりにも無残にトマスの期待と信頼を打ち砕いたのであった。

トマスは「ほかの弟子たちが“主を見ました”と彼に言った」（ヨハネ 20・25）ことを信じようとはしなかったのである。それどころか、トマスの要求は驚くべき大胆なものであった。トマスは見るだけでなく、ひどい要求をするのである。そこには単なる懐疑だけではなく、トマスの内的な苦悶を示す烈しいものが含まれているように思われる。

「我々の宗教のもろもろの証は一明証と暗黒とがあって、ある人々は明らかに見、ある人々は目が見えない一明証に従う人々にあっては恩寵が従わしめるのであって理性が従わしめるのではない。また明証を避ける人々にあっては、私欲が避けしめるのであって理性が避けしめるのではない」（パスカル・パンセ 564）という言葉が当てはまるかもしれない。もし、キリストがトマスの目と心に光を与えなかったなら、彼は暗黒の中に留まったかも知れない。しかし、キリストはトマスの疑いと侮辱に似た要求すら祝福されたのである。

（見ずして信じる）ご復活の八日目、キリストは使徒たちの真ん中にたっていた。他の使徒たちは「週の初めの日の夕方」（ヨハネ 20・19）キリストに会っていたので、キリストのまなざしはトマスに注がれていたに違いない。トマスに向かって言われたことは、文字通りにトマスが望んだことであった。

「感覚の世界に縛られた人間の心理を端的に描き出すこの物語は、昔から、多くの図像になっている。それには二種類があり、一つは「あなたは見たから信じた」という言葉によって、キリストが傷跡を示すもの、他は「手を出して私の脇におきなさい」によって、トマスに脇の傷に触れさせているものである。後者のほうが、不信の表明が強烈で、また演劇的效果が強く、中世末期にはこの型が好まれたそうである。」（「キリスト・美術に見る生涯」柳宗玄）。しかし、真実はそのどちらでもなく、トマスは全身の震えを感じながら、「私の主、私の神よ」と叫んだ。[彼が見たものと、彼が信じたこととは異なる]（大聖グレゴリオ教皇）。トマスが見たのは、手と足と脇に傷を持つ、人間イエスであった。彼はその時、見ることの出来ないキリストの神性を信じたのである。

私たちはトマスに感謝しなければならない。彼を通じて信仰の道を歩む全ての人々に最大の祝福が与えられたからである。「私を見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸である」（ヨハネ 20・29）。